

自主企画分科会

子どもに寄り添う支援を考える ～子ども食堂・学習支援の実践から～

日本社会事業大学ボランティアセンター
学生スタッフ 1step

1. はじめに

本報告では日本社会事業大学ボランティアセンター学生スタッフ 1stepの自主企画について、当日の進行やワークショップのまとめなどを記載する。その上で本企画から得た学びや反省などを考察、分析することで1stepの更なる発展と学生のボランティア参加の促進を期待している。

まず、本企画発案の背景について説明する。

清瀬市内では子ども食堂や学習支援を実施している団体は多く、その中のほとんどの団体が学生ボランティアの不足に悩んでいた。同時に、学生ボランティアの参加があっても、求められるスキルに答えられる質を持つ学生が少ないという現状もあった。それらの現状を打破し、なおかつ新生に対してボランティアを始める第一歩となるように、清瀬市周辺の子ども分野のボランティアを紹介したい、という思いから本企画は発案された。

本企画は、以下の三部構成となっている。

- ① 教えて！子どもボランティア 事前学習会
- ② 教えて！子どもボランティア 体験会
- ③ 振り返りワークショップ「子どもに寄り添う支援を考える～子ども食堂・学習支援の実践から～」

①は主に新生を対象にして清瀬市や東久留米市で行われている子ども分野のボランティアを紹介し、実際にボランティア運営に携わっている方々をゲストに迎えて講話をして頂いた。そこから、紹介されたボランティアへの体験斡旋を行った。

②は①終了後、約1か月の期間を設けて期間中に行われているボランティアを学生が体験するというものだ。新生に対して1stepメンバーがボランティア先に同行し、体験中のフォロー、体験後のアンケートなどを実施した。

③は本報告で詳しく報告するが、①、②を経て、体験学生の学びを確かなものにするために振り返りの意味を込めて、「社大福祉フォーラム2019」の自主企画として実施した。

2. 当日の進行

「社大福祉フォーラム2019」当日の本企画の参加者は36名で、学部生、事前学習会のゲストスピーカー、他大学生、各種専門職員など様々な方々にお越しいただいた。

当日は司会役を2名配置し進行を行った。プログラム内容は次の通り。

○1step 活動報告

昨年度の「社大福祉フォーラム2018」終了後の活動から、今年度6月までの活動についてPowerPointにて活動の様子がわかる写真を用いての報告。

○教えて！子どもボランティア体験会報告

体験学生の体験終了後のアンケートとインタビューの結果をもとに分析・考察したことについて報告。

○振り返りワークショップ

取り扱う事例をペープサートと呼ばれる紙人形を使った劇で発表。その後、参加者と1stepメンバーを含め、4つの班に分けてワークショップを行った。発表形式としてはKJ法を採用した。4班の発表が終了した後、ワークショップのまとめ、全体の総括で締めくくった。

3. 1step 活動報告

1stepは現在1年生4名、2年生7名、3年生3名、4年生4名、ボランティアコーディネーター1名の計16名で活動している。過去1年間の活動は以下のとおりである。

- 6月 「社大福祉フォーラム2018」(自主企画)
- 8月 「Rock Corps」(ボランティア参加)
「他大学交流(明治学院大学)」
- 9月 「アースキャラバン」(ボランティア参加)
- 10月 「きよせ市民まつり」(出展)
- 12月 「第一回サークル交流会」
- 3月 「第二回サークル交流会」
- 4月 「ボランティアトークサロン」
- 5月 「教えて！子どもボランティア 事前学習会」「東久留米子どもまつり」(出展)
- 6月 「社協×1step ボラカフェ」(清瀬市社会福祉協議会と共催)

上記以外にも大学ボランティアセンターに於いて、学生やボランティアサークルの相談、ボランティアの斡旋、ボランティア依頼の解決など様々な活動を行った。

4. 教えて！子どもボランティア体験会報告

1step主催のボランティア体験プログラム『教えて！子どもボランティア～子ども食堂・学習支援の現場から～』が5月に行われた。その際参加した学生にアンケートをとった。アンケートは5段階の評価式のものと記述式のものとなっている。

I. 評価式アンケート結果

(5段階評価：1…とてもそう思う・とても満足 ～ 5…全くそう思わない、とても不満)

- ① ボランティア体験は楽しかったか
1…100% 2…0% 3…0%
4…0% 5…0%
- ② ボランティア体験は難しかったか
1…22% 2…56% 3…11%
4…0% 5…11%
- ③ ボラセンメンバーの対応は適切だったか
1…78% 2…11% 3…11%
4…0% 5…0%
- ④ これからも継続的にボランティアに参加したいと思ったか
1…56% 2…44% 3…0%
4…0% 5…0%
- ⑤ 今回のボランティアの満足度
1…67% 2…33% 3…0%
4…0% 5…0%
- ⑥ ボランティア経験の有無
はい…78% いいえ…22%

II. 評価式アンケート分析

- ・体験会参加者の8割はボランティアの経験があったが、初めてのボランティアに対しての難しさは感じている。
- ・参加者の全員が、継続的なボランティアの参加に肯定的。
→初めてのボランティアに対する難しさ、抵抗をなくすためにボラセンメンバーが仲介する必要がある。

III. 体験会参加者インタビュー結果(一部抜粋)

- ① 今回の企画に参加した理由
 - ・子ども食堂のボランティアに興味があったから
 - ・児童福祉に興味があったから
- ② ボランティア体験先を希望した理由
 - ・説明会の発表内容にひかれたから

・サークルではできない活動だったから

③楽しかったこと

【子ども食堂】

・子ども食堂の方との会話、子どもと遊ぶ体験が新鮮だった

・ほのぼのとした雰囲気や会話

【学習支援】

・中学生が苦勞しながらも一人で問題に取り組み「あっ！わかった！」という姿が見られたこと

④大変だったこと

【子ども食堂】

・子どもへの注意の仕方

・帰りの時間になった時に、子どもに帰るようになんと言えなかったこと

【学習支援】

・どう教えたら子供が理解できるか考えること

・勉強をするように子どもに言うこと

⑤今回のボランティアで学んだこと

【子ども食堂】

・みんなで食事をとることの大切さ

・自分から話しかけないと距離を詰められないということ

・子ども食堂が子どもの居場所づくりのためにあること

【学習支援】

・子どもとのかかわり方

・学習の大切さ

⑥今回のボランティアを継続していきたいと思うか。

【継続したいと思う理由】

・時間が空いているから

・今回できなかったことを次回はできるようにしたいから

・いろいろな子どもとの関わりから将来のための経験が積めるから

【考え中】

・やりたいボランティアのイメージと違っていたから

・ボランティアの数が多く、本当に自分が必要とされているか疑問だったため

IV. 体験会参加者インタビュー分析

・一人一人がただ参加するだけでなく、自分に何ができて何ができていなかったのかを考えている。→継続的に参加することで、子どもとの関わり方を発見する。経験者のフォローが必要

・初めてのボランティアで子どもとの関わり方に難しさを感じている人が多い。

5. ワークショップ

I. 事例紹介

【子ども食堂】

A君は一度騒ぎ出したら止まるのが苦手な男の子。友達のB君とオセロをしている際、B君のずるをきっかけに小競り合いになり、騒いでしまい、子ども食堂に来ていた周りの家族はA君を心配そうにみている。A君のお母さんはA君に対し、「恥ずかしいからやめなさい！」と、今にも手が出そうな雰囲気。ボランティアの大学生はA君の癇癪を止め、お母さんを落ち着けようと必死。

【学習支援】

ある日の学習支援の場面。その日は3人の小学生が来ており先生（学生）が2人しかいなかった。前半は小学生3人も遊んでおり、後半から少しずつ勉強をし始めるという様子だった。しかし普段は勉強するY君が他の2人が勉強を始めても部屋の中をうろうろしていた。だんだんY君はイライラし始め暴れてしまった。原因がわからない先生2人はどうにか静止させようとするが、さらに暴れてしまう。

II. グループディスカッション

以下は4つの班の意見をまとめたものである。それぞれの班で上記事例の問題点は何か？注目すべき観点はどこか？大学生ボランティア

としてできることは何か？子どもや保護者への支援はどうあるべきか？等について、いくつかのキーワードの下に出された意見をまとめ、意見交換をした後、班のファシリテーターが全体に向けて発表し、各班の考察を共有した。

※丸数字は各班が考察したキーワードである。

[以下、参加者から出た意見を一部抜粋]

<子ども食堂 1班>

① 子どもへの対応

- ・喧嘩を一回止めて、A君は何が嫌だったのか、B君はずるした？してない？したなら謝らないの？これらを聞き出す。
- ・A君、B君それぞれの受け止め
- ・発達特性の可能性
- ・A君は騒ぎ出したら止まるのが苦手な男の子とあるので、無理にいなそうとするのではなく、A君のペースで落ち着いてもらうように対応するべきなのでは、と思った。

② 周囲への対応

- ・周りへの影響
- ・周りの子がケガしないように、他の子にも目を向ける。怖がらないようにサポート。

③ お母さんへの対応

- ・お母さんの気持ちを聞く。悩みがあるのかもしれない。
- ・お母さんから「恥ずかしい」と言われたら、A君は余計に興奮してしまうし、自分は恥ずかしい存在なのだと思ってしまうかもしれない。
- ・虐待

④ ボランティア

- ・A君とお母さんの対応を大学生が一人で担うのは大変なので、役割分担などが必要だと思う。
- ・オセロなどの遊びであっても、それをすぐ近くで見守るボランティアはスタッフがいるべきだったと思う。

⑤ ③と④の関係性

- ・A君のお母さんが手を出してしまうのを止め

るのはよいことだと思った。場所が子ども食堂なので、大勢の人がいる中で手を出してしまうと、雰囲気壊れてしまう。

- ・学生がお母さんとA君の間に入ることは難しい。大人の介入が必要。

⑥ その他

- ・子ども食堂→地域
- ・次へ向けて
- ・A君とB君の今後の仲

<子ども食堂 2班>

① A君の性格について知る

- ・A君が落ち着く方法をボランティアで共有しておく。
- ・A君の特徴を踏まえ、他の子ともめないように、日頃からボランティアが気を配る。
- ・その子がどのような子なのか、事前に知っておく。

② 見守る

- ・A君、B君それぞれにボランティアがついて、別の遊びへ誘う。
- ・普段からA君に目を配る。
- ・A君が騒ぎ出す前に、スタッフが様子を見ながら声かけをする。

③ 一人一人に対応する

- ・B君にも話しかける。(なぜA君が怒ってしまったのか聞く)
- ・周りが不安そうにして、声をあげると、A君が余計に暴れてしまうと思うから、周りは冷静に対応する。
- ・A君に役割を与える。

④ 親からの信頼を得る

- ・母親とA君に他の部屋に行ってもらう。
- ・一度子どもだけで来てもらう。

<子ども食堂 3班>

① A君

- ・大学生などがA君に何があったのかを聞く。
- ・A君に対して優しい声のトーンで声をかける。

② B君

- ・A君とB君を別の場所に移動させて、A君、B君の話をそれぞれ別々に聞いて落ち着いてもらう。
- ・B君がずるをしたことが始まりなので、B君に謝るようにうながす。

③ A君の母

- ・A君のお母さんはA君の性格を知っていると思うから、お母さんがまず落ち着くべき。
- ・普段のA君の家でのA君と母の関係

④ スタッフ

- ・相手についてだけでなく、自分はどう思ったのか聞く。
- ・喧嘩は仕方ないので、
Ⅰ 仲直り（のやり方を学ぶ手伝いを）、Ⅱ 話し合う（Ⅰについて話してもらう）、Ⅲ 落ち着く、を目指す。
- ・お母さんへのフォロー（大人の職員、年齢が近い～年上）

⑤ 予防

- ・「恥ずかしいからやめなさい」という母親の感覚、価値観に対してフォローする。
- ・お母さんの対応を見ていると、A君を「恥ずかしい」と言い、自分と同一視しているよう。
- ・人を傷つけてはいけないというルールは明確に。

⑥ 新事業

- ・保護者同士のお食事会を開催
- ・自助グループ作成

<子ども食堂 4班>

① B君

- ・A君を心配そうに見ているB君にも話を聞く。

② 距離感

- ・とりあえず一旦二人を離して、両方の言い分を聞く。そのうえで謝罪を聞くようにする。
- ・A君とお母さんの距離をおく。

③ ボランティア

- ・手が出そうな雰囲気なので、一旦冷静になれるよう、距離を離すなど、責めないでボラン

ティアの大学生が話を聞く。

- ・ボランティアが二人の話をよく聞いて、子ども同士が落ち着けるようにする。子どもの言い分を共通理解する。

④ お母さんへの対応

- ・できるだけお母さんの関わりは無いようにした方が、A君もお母さんも落ち着くのではない（周囲を気にして感情的になってしまう）
- ・事例中の「今にも手が出そう」という点について、普段からしつけの一環として手を出してしまっているのかなと思ったので、母親から息子に対してのアプローチも考えなければいけないのかと思った。

⑤ A君との関わり方

- ・A君とB君の二人をみんなから引き離して、ゆっくり話を聞いてあげる。二人が冷静に振り返ることができるような声かけと聞き方。
- ・食事の場、子どもがたくさんいる場なので、外に出して落ち着くまで待つ。

⑥ 雰囲気づくり

- ・ボランティアは見守っている雰囲気づくり、フォローする。
- ・この子ども食堂は地域の方がたも来ていると思うので、「みんなが見守っているよ」という雰囲気づくりが大切。

<学習支援 1班>

① Y君

- ・子どもの特性・背景の理解 → どうして学習支援に来ているの？ 勉強は好き？嫌い？
- ・Y君が「勉強したくない」と言った時点でその気持ちを丁寧に聞き取る人がいなかった。
- ・Y君は孤独な気持ちになったと思う。

② Y君への対応

- ・したくないと思った時点で、Y君に勉強させることは難しいと思うので、無理に勉強させようとするのは逆効果なのではないかと思った。
- ・Y君と先生一人で別室へ行って、なぜイライラしてしまったのか、何か事情があったのか、

ゆっくり話してみてもいいと思う。

③ 大学生

- ・普段と異なることが起こってしまったときの先生の臨機応変な対応が重要になる。
→叱るのではなく、どうして暴れてしまうのかを小さなことでもいつもと違う点を探し出すことも重要か。
- ・終了後の振り返り

④ 居場所

- ・勉強に対しての苦手意識
→勉強が楽しいと思えるような環境作り
- ・居場所づくりとしての学習支援
- ・学習支援の目的
→居場所としての機能と学習支援としての機能のバランスの難しさ

⑤ その他

- ・学生側の不安がX君とかにも伝わってしまっているのかなと感じた。
- ・環境（人・モノなど）
→学生の声かけの仕方、この子が落ち着く環境は？どうしたら学習に向きえある？

<学習支援 2班>

① スタッフの対応

- ・Y君の他の二人の子への声かけも忘れず、離して勉強できる環境をスタッフが作る。

② 職員の配置

- ・Y君を孤立させないこと。誰かが相手をしなくては。
- ・大学生と小学生の人数を合わせ、1対1で教えられる環境を作るべきだった。

③ Y君の話を聞く

- ・静止させようとするだけでなく、声かけをするなど、何が不満に感じているかを聞く。
- ・「落ち着いて」「勉強しよう」という声かけではなく、「何があった？」「どういうことが嫌なの？」とスタッフが落ち着いて話を聞く。

④ 時間を分ける

- ・最初にある程度遊びと勉強の時間を決めておく。

⑤ Y君以外への話しかけ

- ・Y君以外の二人も集中できなくなるので、その日は勉強を少なめにするか、遊びの日にして、Y君が落ち着ける環境を作る。

<学習支援 3班>

① 教室の性質

- ・どんな教室なのか。

② Y君

- ・普段は勉強するのであれば、その日落ち着きがないのは理由があるのかも。話を聞いてあげては？
- ・信頼しているからこそその行動かも？
- ・一度部屋の外に出して落ち着かせる。
- ・X君、Z君から離れた後でどのような声かけをすべきか？

③ 学生とスタッフ

- ・支援スタッフ側の役割分担、バランス（強み、弱み）
- ・部屋の中をうろうろした時点で、先生が声をかけるべきだった。
- ・大人側は冷静に！

④ X君、Z君

- ・それぞれの子どもの困りごと、求めていることの聞き取り
- ・X君、Z君を安心させる声かけも必要だと思う。

<学習支援 4班>

① 環境

- ・遊びと勉強をきりかえられるように時間で区切る。
- ・勉強にはいりやすいように部屋の環境を変える。

② 声かけ

- ・Y君の家庭あるいは学校等で何かあったと思われるので、二人から離してゆっくり話を聞いてあげることが、学習より先にしてあげることかと思います。

- ・「勉強しなきゃだめ」のような義務的な口調なのはよくないかと思った。
- ・Y君が感情的なままでは話を聞くことができないので、落ち着くまで見守る。

③ 方法

- ・一定の目標を定めてやってみる。本人の集中力、モチベーション、進捗を見て提示できればいいかと思う。

④ 役割

- ・大学生ボランティアの役割分担

Ⅲ. 分析

【子ども食堂】

オープン型の子ども食堂で子どもが癇癪を起こした、という設定の事例だったが、どの参加者も「子どもの気持ちに寄り添う」という考えをよく理解して意見を出していたように感じる。また、今回の参加者は社会福祉を学び始めたばかりの新生から、大学のOBOGで、現在現場で活躍している方までいたので意見の中に専門性の差が見て取れた。特に母親に対しての意見の差は大きかった。

今回の事例は「子どもに寄り添う」というテーマであるが、その実母親との関係やボランティア学生の役割、限界など多角的、複合的な視点から考えなければならぬものであったため、難易度が高いと感じる参加者もいたように思われた。様々な意見、視点を共有できるようなディスカッションにすべきだと感じた。

【学習支援】

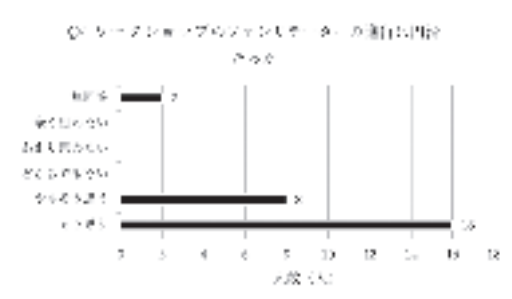
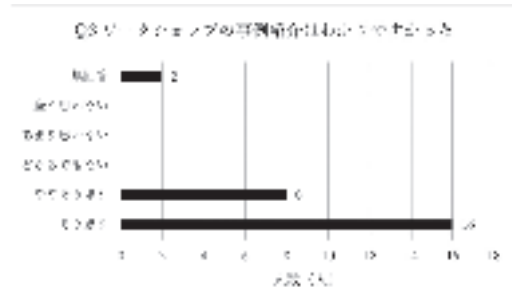
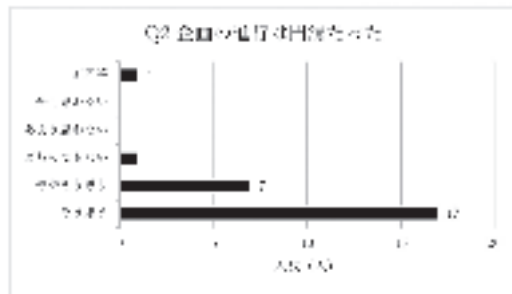
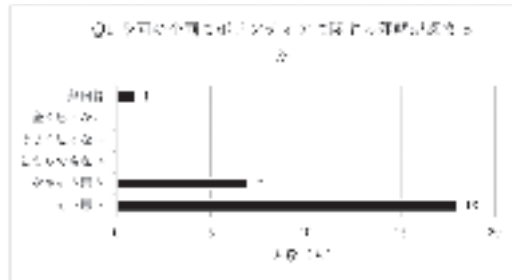
学習支援も子ども食堂の事例と同様に子どもの癇癪についての事例だが、子ども食堂との相違点はいくつかある。まず、学習支援にいる大人は学生ボランティアのみであり、その分責任や負担がすべて学生ボランティアに降りかかってしまう。そして学習支援の性質上、ボランティアに求められる質が子ども食堂よりも高いということだ。総じて学習支援では子ども食堂以上に学生ボランティアの持つ意味は大きく、その分子どもに与える影響も大きくなる。今回

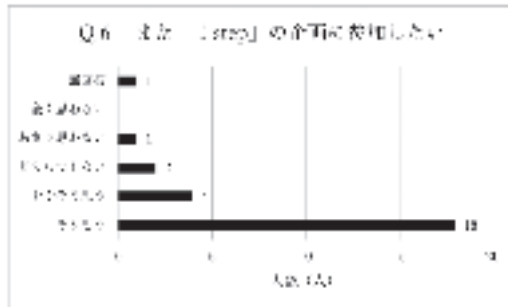
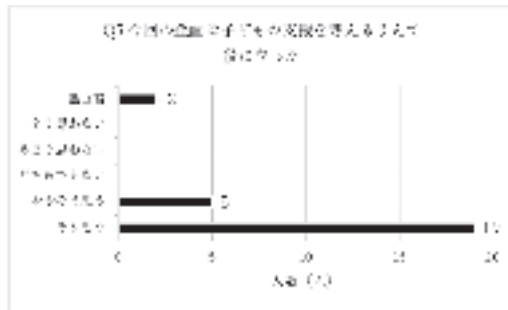
の参加者の中には学習支援の経験者は少なく、学生ボランティアに対しての意見にあまり実感が伴っていないように感じた。

6. アンケート集計

参加者アンケート結果

1 step と日本社会事業大学ボランティアセンターのボランティアコーディネーターを除く参加者で、アンケート回収26枚。





以下の項目について、ご自由にご記入ください。

◆この企画を何で知りましたか（複数回答あり）

- ・パンフレットで見て 11
- ・友人からの紹介 5
- ・ボランティアセンターからの紹介 3
- ・先輩からの紹介 3
- ・職場の方より紹介 1
- ・学生から聞いて 1
- ・HP 1
- ・SNS 1
- ・授業で聞いて 1

◆どのようなボランティアの経験がありますか、また今後どのようなボランティアをしたいですか

<ボランティアの経験>

- ・児童館、学習支援、被災地復興支援
- ・子ども食堂 10
- ・学習支援 7
- ・特養でのレク、児童センター
- ・子どもまつり
- ・保育園
- ・児童養護施設での学ボラ、おまつり、あそび
- ・ゴミ拾い

<やってみたいボランティア>

- ・学習支援 6
- ・子ども食堂 3
- ・お祭りやイベントボランティア
- ・夏休みの共働きの子どもの居場所づくり
- ・子どもの学習・生活支援、遊びの支援
- ・サロン活動
- ・中高生に関われるボランティア

◆この企画について質問・感想・意見などご自由に記入してください！（一部抜粋）

<子ども食堂・学習支援の運営者、関係者>

- ・学生さんがハキハキしていて、ペープサートのアイデアもすてきでした。学生さん自身がボランティア活動と学生をつなぐ中間支援をしていることも知り、他大学にはない魅力だと感じました。
- ・インタビューのV編の結果をもう少し説明してほしい。
- ・活動から見える子どもの支援の視点について深められたのはよかったです。様々な立場の方と学生が交わるチャンスがあればよいかと思います。

<学生>

- ・KJ法で終わるのではなく、意見交換などのディスカッションがあるとよかった。現場の人に質問等をディスカッション内でしたかった。
- ・自らも行っている学習支援について、どうアプローチをかけるべきか考えるよい機会になりました。子ども食堂も夏から手伝いを開始するので、予習としてもよい勉強になりました。
- ・充実したディスカッションができ、自分の考えの再確認や他の人の考えを聞いたよい機会となりました。
- ・普段聞くことができない方々の意見を聞くことができました。
- ・半年ボランティアをしていなかったが、ボラ

ンティア活動をしてみたいと思えた。

7. おわりに

本年度で1 stepの活動も3年目となり、メンバーも増えて活動の基盤もしっかりできていたからこそ、今回のように学習、実践、振り返りという段階的な企画が実現した。

5月の事前学習会から6月の学内学会までの全体を通してのまとめとしては1 stepの成長を強く感じた。3年生はもちろんのこと、様々な役割を、時には協力して時には率先してこなしてくれた1, 2年生の活躍には頭が下がる思いである。これからの1 stepを担っていく彼ら彼女らには、社会福祉の大学でボランティア分野をリードする存在になってほしいと願う。

今回得た知識や技術を確かなものにすることで1 stepの目標である「学生とボランティアの懸け橋になる」というものに大きく近づけるだろう。

最後に、今回の企画に関わった全ての学生、関係者の方々に対し感謝し、深く御礼申し上げます。